



TITLE:

『源氏物語』の本文と注釈(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

林, 欣慧

---

CITATION:

林, 欣慧. 『源氏物語』の本文と注釈. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19879>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	林 欣慧
論文題目	『源氏物語』の本文と注釈		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>『源氏物語』に関する論考は多岐にわたるが、作品を研究する上で最も基本となる本文と注釈には、尚考えるべき問題が残っている。本論文は第一編と第二編に分かれる。第一編は『源氏物語』の注釈上の問題、第二編は本文について再検討を試みたものである。</p> <p>『源氏物語』を現代の諸注釈書で読んでみると、「不詳」とある、或いは疑問形で終わる注釈が少なからずあることに気づく。『源氏釈』以来千年近く経ったが、『源氏物語』を読解する上で、意味が判明しない、或いは現在提供されている注釈だけでは釈然としない箇所は、依然として存在している。その原因はいくつかあるが、古歌、漢籍、仏典など、『源氏物語』が著された時代の作者の知識を全て把握することが困難であること、或いは作者が独自の工夫を施したものの後人によって理解されないこと、という二点が主たるものとして挙げられる。</p> <p>第一編第一章で取り上げた箇所は、そのいずれにも該当する。椎本巻において、大君の髪が、「末すこし細りて、色なりとかいふめる翡翠だちていとをかしげに、糸をよりかけたるやうなり」と描かれている。「色なりとかいふめる翡翠だちて」という、髪を翡翠に譬える一節について、古注釈以来、翡翠、即ちかわせみの毛色やその習性の説明に力を注いできた。しかし、それだけでは、女性の髪を翡翠に譬えるこの表現が一体どこから得られたものか、このような表現が何故わざわざ使用されたのかということは説明されない。上述の疑問を解決するために、椎本巻の当該箇所の表現の源泉を究明することにした。</p> <p>はじめに、「翡翠」という言葉には鳥（もしくはその羽毛）と緑色の宝石の両義があることを確認した。次に、『源氏物語』以前の和歌集、物語、および日本の漢詩文集の中から、女性の髪を翡翠に譬える用例を求めたが、該当するものは確認できなかった。しかし漢籍に目を向けると、管見の限り三例の用例が確認できる。唐代中期の白居易による二例と、唐代末期の林寛による一例である。作者が白居易である点、および平安朝における「楊柳枝」を題にした作品の享受状況から、三例中、白居易「楊柳枝二十韻」中の「鬟低翡翠垂」という句が椎本巻の当該箇所に取り入れられた可能性が高い。</p> <p>また、次の二点の理由により、大君の人物描写に「楊柳枝二十韻」の表現が取り入れられた可能性は一層高くなる。一点目は、「楊柳枝二十韻」に大君という人物の特質と同旨の文言が見られることである。二点目は、同詩において「鬟低翡翠垂」の前</p>			

に「先将髪比絲」という一句があり、椎本巻当該箇所においても「翡翠だちて」の直後に「糸をよりかけたるやうなり」の一節があり、両者の字句の親近性が高いということである。

以上の考察から、椎本巻の当該箇所の文章表現は「楊柳枝二十韻」を意識した結果と考えられる。このことを踏まえて、作者はその表現を取り入れるにとどまらず、更にそれを大君の人物造形に活用するという独自の工夫も施していることを論じた。

次いで、第一編第二章では「みぎはの氷」という言葉に着目した。薄雲巻一例、椎本巻一例、総角巻一例、および浮舟巻二例と、合計五例数えられる。現行の諸注釈書は、薄雲巻の用例を「庭の池の水際の氷」と特定する傾向にある。一方、総角巻と浮舟巻の用例だけを「川辺の氷」と明記する注釈書も見られ、「みぎはの氷」という言葉の解釈は混迷状態を呈している。この言葉と池の氷とは、どのように使い分けられているのか。この疑問の答えを求め、以下のように考察を加えた。

はじめに『源氏物語』以前の「みぎはの氷」の用例を調べたところ、池よりも山川のそれとして使用されるものが多く見られる。次に、『源氏物語』における「みぎは」の使用状況について調査し、『紫式部日記』の描写とも照らし合わせたところ、池のそれを指す場合、「みぎは」の前に必ず「池」を付けることがわかった。

『源氏物語』において「みぎはの氷」という言葉は、薄雲巻と宇治十帖のみに現れる。薄雲巻に登場する大堰の邸と宇治の山荘とに関する地理的描写を比較したところ、いずれも山里で川の周辺にある。更なる共通点を求めたところ、『源氏物語』において、この両地のみ「かはづら」として位置づけられていることが判明した。以上の考察から、『源氏物語』の中で「みぎはの氷」は、「山川」のそれとして使用されていると考えられる。さらに「池」の用例の分布状況から、京の邸宅では「池」、山里で「かはづら」にあるところでは「みぎは」と、場所に応じて両者が使い分けられていることがわかった。このことから、「みぎはの氷」という言葉には作者の工夫が秘められていたと結論した。

第一編第三章では、宿木巻の「近き世に花降らせたる工匠もはべりけるを、さやうならむ変化の人もがな」という、大君喪失を嘆く薫の発言を取り上げる。この薫の哀願は、具体的に何を意味しているのか。古注釈以来、様々な見解が示されてきたが、この一節を解釈するために、必ずしも適切、或いは十分なものとは思えず、根拠となる文献も示されていない。作者の有していた知識が把握できず、注釈に疑義が生じた例である。

当該箇所の解釈をより掘り所のあるものにするために、その背景にある故事を探索した。はじめに、国書において、「花を降らせる」とはどのような状況下で使用される表現であるか調査した。その結果、近世書写の『洛陽誓願寺縁起』の中で言及された、優填王なる人物による造像説話の構想・語句が、当該箇所との親近性が高いとい

うことが判明した。

更なる手がかりを求めてその周辺の資料を探り、まず大安寺の縁起文に着目した。同縁起の天智天皇と文武天皇の造像経緯に関する部分には特徴的な語句があり、宿木卷当該箇所の前後の文章との関わりや、薫の願望のありかたを確認する上で注意すべき点があることに気づいた。この大安寺と関わりのある文献として、河原院における大安寺仏像の模像の開眼供養の様子を記した「為仁康上人修五時講願文」（『本朝文粹』）がある。その中に、優填王の造像説話を意識した文言が見られる。このことから、この故事は平安中期までに既に流伝していたことが分かる。

「近き世」という条件も考慮に入れると、時代的に相当遡るこの故事を当該箇所の直接の出典とすることは憚られる。しかし、優填王造像説話と宿木卷とが、字句や構想において近似していることは確かである。また、優填王造像説話の流布状況から、当該箇所の背景にある故事の源泉として同説話の存在が考えられる。その内容を考察することによって、当該箇所の薫の言葉はより深く理解できるようになった。

第一編の諸章において、問題とした箇所や考察の過程で取り上げる語句の有効性を検証するために諸本を確認した際、本文の異同に度々直面した。現在『源氏物語』の研究は、『源氏物語大成』が大半の巻の底本として採用している大島本の本文、もしくはそれを校訂した諸注釈書の本文に基づいて行われることが多いが、転写の過程でその本文にはどのような異同が生じたのか、また、異同が生じた理由はどこにあるのか。第二編では、本文の異同を調査することによって、『源氏物語』がどのように読まれていたかを考察した。

第二編第一章では、「別本」と分類されている諸本の中でも一際特異な様相を見せる、中京大本と阿里莫本共通の本文に着目し、若菜上・下巻について調査した。両巻の本文は他の諸本と比べて、一見欠文のように思われる箇所が多い。一方、加筆と見られる箇所も存在する。いずれについても、従来全体的に考察されてはいない。

それぞれどのような原因で発生したものか、欠文部分は十五字以上、加筆部分は十字以上のものに限定して調査した。前者については、上・下巻とも目移りによるものが少なからず確認できる。中京大本と阿里莫本共通の祖本の書写の質は決してよいとは言えない、ということをもまず念頭に置かねばならない。

次に、上巻には類義的表現を省略するという意図のもとで削除された箇所が少なからず見られる。下巻にも同質の箇所がある。また、下巻においては、紫の上が危篤に陥ることに源氏が動転する描写も省略されている。加筆についても、上・下巻ともに、前後の字句とのつながりを考慮したためと思われるものがある。中京大本と阿里莫本の若菜上・下巻の本文は同一の志向を持ち、文意を簡明化し、紫の上と女三宮との力関係において後者を優位に置こうとする意図が看取できる。

これらの異文は単なる書写時の不注意によるものではないけれども、特定の意図に

よって本文を改変した結果、かえって整合性が保てず、文脈がぎくしゃくする結果を招いたところもある。『源氏物語』という長編作品を前にした後世の読者の「世界」の限界を窺うことができる。

このように、『源氏物語』に対する理解や意識の違いによって本文に異同が生じることは、その「続編」的な内容を有する作品からも看取できる。

第二編第二章では、そのような作品の代表として広く知られている、夢浮橋巻のその後を描く『山路の露』について考察した。この作品は絵入り版本『源氏物語』の付録として刊行された。その本文について、近世の読者によって「文詞といひ哥といひ事のさますべて」、『源氏物語』に「似かよ」っていると評されていたことが夙に報告されている。このように評価されている「絵入源氏物語」所収本文を代表とする系統に対し、写本系と称される伝本群がある。この写本系の中で現在確認できる最古の伝本に当たる玖山九条植通の自筆本が紹介されて以来、『山路の露』本文の成立経緯や二系統の特色についても活発に議論されてきた。

本論では『源氏物語』の「続編」という視点から、版本における、原作を彷彿とさせる箇所に着目した。例えば、薫が自身の心境を打ち明ける場面の、浮舟の死に対する反応を述べる一節として、版本、および同系統とされている書乙本・天理本には「あしたの雨、夕の雲」として眺めるとある。故人を思慕する状況、雨と雲、および「ながめ」という組み合わせから、『源氏物語』葵巻における、源氏と頭中将が葵の上を偲ぶ場面、ひいてはその場面が踏まえた漢籍の表現が真っ先に想起される。一方、写本系には「あしたのつゆ、ゆふべのくも」とある。一見前者の方が原作らしい表現を有する。しかし、用例を確認したところ、寧ろ写本系の方こそ当時の他作品にも類例の見られる表現である。

この一節の他に、小野を訪れた薫が屋内を覗き見る際の描写や、自分が失踪した後の薫と匂宮の反応を右近から聞いた浮舟の心内文にも着目した。その結果、『源氏物語』の続編たらしとする意識と、『山路の露』という後世の作品の独自性との間に生じる齟齬が、改めて浮き彫りとなった。

後人の作品解釈が原作者と異なることにより、作品理解に影響するほどの異文が生じる場合がある。作品を注釈的に読解するにあたり、常に本文異同に細心の注意を払う必要があることを強調した。

(論文審査の結果の要旨)

『源氏物語』に注釈をつける営みは、引用された和歌、漢詩文、故事などを注記するという形で、物語成立から約二百年後にはすでにはじまっていた。それ以来現在に至るまで数多の注釈書が著され、作品を正確に理解しようとする努力がなされてきた。それでもなお、典拠未詳とされるところや、解釈の定まらない本文は少なからず残されている。本論文第一編の各章は、そうした疑義の残る箇所について注釈的研究を試みたものである。『源氏物語』の中でも続編とされる後半の巻々を主たる対象とする。

第一章では、椎本巻における宇治大君の髪を描写した「色なりとかいふめる、翡翠だちて」という一節を扱う。後世には「翡翠のかんざし」という慣用句ともなるこの表現は、「翡翠」という漢語を用いることから漢籍に基づく表現であることは容易に予想されたが、明確な典拠は突きとめられないまま放置されていた。論者は近年整備されてきたデータベースの類を活用して、数は少ないものの唐詩に女性の髪を翡翠にたとえる例があることを指摘し、中でも『白氏文集』巻六十五「楊柳枝二十韻」に注目する。そして『源氏物語』の作者が「楊柳枝二十韻」に目をとめた蓋然性が高いこと、物語の前後の表現にも詩の影響が見られることなどから、この詩が典拠であることを丁寧に論証してゆく。「楊柳枝二十韻」では女性を柳の木に見立てているが、大君も柳のイメージで造型されており、後の巻で臨終の様が「ものの枯れゆくやうに」という印象的な形容でもって描写されるところにも、それは一貫しているという。女性をある植物にたとえることは『源氏物語』正編の得意とするところであったが、続編でもその方法が少々形を変えつつ用いられ、しかもその発想に漢籍が深く関わっていることを見抜いた好論である。

第三章では、宿木巻より、大君の死後、亡き人に似た像を造らせたいという願望を述べる薫の発言を取り上げる。そのうち「近き世に花降らせたる工匠もはべりけるを」という一節は、何らかの故事、説話の存在を示唆しており、古注釈以来その究明に努めてきたものの定説を見なかった。本論文が新たに指摘したのは、『増一阿含経』等の経典に見える、釈迦の不在を嘆く優填王が名匠に生身の仏像を造らせたという故事である。この優填王造像説話は日本にも夙に伝わっていたものだが、薫の発言に完全に合致する内容をそなえ、かつ『源氏物語』作者の目に触れたと思しい文献が現存しないためか、これまで見過ごされてきた。論者は、経典のほか、大安寺、誓願寺、長谷寺など諸寺の縁起を博搜して造像説話の日本における展開をたどり、物語との懸隔を埋めようとする。その結果、薫の言及するのが優填王の故事そのものであるとはいえないまでも、その淵源にあるものとして無視できないことは十分に論証された。釈迦の姿を渴仰する衆生の思いは、故人の面影を慕う思いに通じる。優填王造像説話は、道心と煩惱の相克、形代の登場といった、『源氏物語』続編の主題ともいえるべき事柄ともつながりを持つであろう。本論文の成果が宿木巻当該箇所の解釈にとどまらず、物語全体の研究に大きな一石を投じたことは間違いない。惜しむらくは、作

者が直接拠った文献を生真面目に求めようとするあまり、やや窮屈な論になってしまったことである。説法など文献に残らない形で説話が伝えられた可能性をも視野に入れ、より柔軟に伸びやかに発展させてゆくことを期待したい。

このような注釈的研究を進めるにあたり、論者は常に取り扱う本文の諸本間における異同に目を配り、自らの研究の基盤を確かなものにしてきた。第二編は、その中で得られた知見をもとに、本文の問題を論じたものである。第一章は『源氏物語』諸本の中でもとりわけ特異な本文を有することで知られる中京大本・阿里莫本の問題を、第二章は『源氏物語』の後日談である『山路の露』の本文を取り上げる。ともに誤写のレベルの本文異同ではなく、後世の読者が『源氏物語』をどのように読み、どのような態度で『源氏物語』に接したかを浮かび上がらせる事例をいくつも挙げてゆく。本文研究が作品研究の基礎というばかりでなく、受容論ともなり得るという見通しのもとになされた諸論である。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十八年三月八日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。